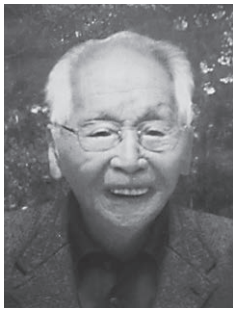
高山の文化を高めた人々

86

「昭和・平成を駆け抜けた父」
山腰 曠（ひろし）

山腰 進



令和六年十月六日から十九日まで、一之宮町にある「位山交流館」において、父・曠の遺作展を開催していただきました。平成二十九年の父の死後、何度か計画されましたが、コロナ禍で日程が度々延期され、ようやく開催に至りました。

父の死から七年が経ち、作品の所有者の中にはお亡くなりになられた方もいて、作品が集まるか不安でしたが、どれも丁寧に保存されており、六十点余りの作品を展示することができました。期間中の来場者は四百名を超え、父との思い出を語られる方や何度も足を運ばれる方もいて、皆さんに支えられた人生であったことを改めて実感するとともに、たいへんありがたく心から感謝しております。

山腰曠さんを偲ぶ企画展（位山交流館）

＊

父は、大正十五年一月十日、旧宮村で生まれました。生家は貧しい分家の小作農で、尋常小学校しか行かせてもらえなかったとよく話していました。私に大学まで進むことを許してくれたのは、そんな悔しい思いがあったからだと思います。父は、小さい時から家の農作業や炭焼きなどに祖父と従事していたようです。

やがて太平洋戦争が始まり、昭和二十年に十九歳で海軍に招集され、広島まで行ったところで終戦を迎えました。原爆の直接的な影響は受けなかったものの、当時は広島市の近くにいたようです。

戦後は地元で農林業に勤しみ、営林署で仕事をしたり、土建会社に勤めたりしていました。父は、昔から各家につけられていた屋号をはじめ、林業を通して得た巨木の位置や木材の運搬に関する知識など、地元の民俗・歴史等についてよく知っていました。昭和初期から平成に至るまで、戦争や農林業、会社員など多くの経験をしたからでしょう。しかし、村内の会社に勤めていた五十四歳の時、産業事故に遭い、右腕を失ってしまいました。

驚いたのは、手術の翌日に早々と左手で字の練習を始めたことです。その後、水墨画に出会い、六十五歳頃からは日本画を始めました。特に、「臥龍桜」を中心に描いていました。樹齢千年を超える臥龍桜は、台風で枝が折れても、残った枝からまた花が咲きます。その生き様を自分の人生と重ね合わせていたのかもしれません。

尋常小学校五年生の時、習字で「なせばなる　なさねばならぬ何事も　ならぬは人のなさぬなりけり」と書いています。その時代の影響もあると思いますが、当時の父の揺るぎない志が偲ばれます。

＊

農作業で疲れていても、夜遅くまで描画していた姿をよく覚えています。精力的に作品の制作に励み、県展や市展のほか、臥龍桜日本画大賞展、サロンデボザール展などに出品し、各種の賞や、高山市文化協会功労顕彰者表彰などをいただきました。

絵画以外にも、民俗・歴史等の様々な分野に興味や関心を持ち、また、地域の事にも熱心に取り組み、旧宮村の村議会議員をはじめ、教育委員や文化協会長も務めました。家の田畑作業では、片腕が無いことを感じさせないほど普通に機械を操っていました。しかし、失った右腕については「感覚的にあるような気がする」「天候が悪くなると傷口が痛む」などとよく語っていました。

リンパ腫と診断を受けて入院していた病院で症状が急変し、平成二十九年五月六日、静かに永眠しました。その日は、水無神社の大祭の最終日でもありました。享年九十二歳。苦しい生活を体験し、戦争と平和を経て、産業が発展した昭和から平成にかけての激動の時代を強い意志を持って駆け抜けた人だったと思います。

企画展で展示された作品「萬開」